

政治人

political animal

菊池理夫 (政治理論)

KIKUCHI, Masao (Political Theory)

はじめに

「政治人」(political animal) とは、アリストテレスの「人間は自然に [本来] ポリス [政治] 的動物である」という命題をより普遍化したものである。「政治人」とは、近代以後に理論的にも実践的にも政治活動の中心となる「権力」によって支配する者ではなく、コミュニティのなかでお互いに協働して政治活動する人間を指している。

現在の社会科学では個人の利益を最大限に追求する「経済人」(homo economicus) モデルが支配的であり、このモデルが政治学、とくにその実証的研究で多く用いられている。しかし「経済人」は、近代以後の人間論であるのに対して、「政治人」は、古代ギリシアの「都市国家 (ポリス)」に由来し、西欧の中世・近代を経て現代に至るまで発展的に継承されている人間論のモデルである。その意味で、「政治人」は、より普遍的な人間論である。

アリストテレスの「ポリスの動物」

アリストテレスは『政治学』の冒頭で、「すべてのポリスはある種のコイノーニア (コミュニティ)」であり、何らかの善をめざすコミュニティのうちでも、もっとも包括的で、「有力な善をめざすものがポリスである」という。「人間は自然に [本来] ポリス的動物である」のは、人間だけが「言葉」によって「善・悪や正・不正などを共有」でき、自然に「コミュニティへの欲求」が備わっているからである。

ただし、最悪の政体である「僭主制」は、「善」や「正」を共有せずに、支配者が個人的な利益を追求するものである。これに対して、最善の政体は、「共通の利益」をめざす「自由人のコミュニティ」であり、本来ポリスの支配は「自由で、お互いに平等な人々」による「善き生」をめざすものである。

このアリストテレスの「ポリスの動物」は、13 世紀のトマス・アクイナスによって、「人間は自然に社会的動物である」とラテン語に訳された。20 世紀の政治哲学者ハンナ・

アレントは『人間の条件』のなかで、「ポリスの動物」から「社会的動物」への変化をギリシアの活動的な政治が失われた象徴と考えている。

たしかに、アレントのいうように生存のための社会的な交わりは動物にもあり、人間固有の「政治」は、共通の言語を用いて共通の利益、共通の善を求める「ポリス」の活動であるかもしれない。しかし、トマスは、アリストテレスのいう「共通のもの」を一括して「共通善」と呼び、『君主の統治』では、「大衆の共通善」に基づく政治を主張している。このことは、コミュニティー＝社会の「共通善の政治学」として、アリストテレスの政治哲学を発展させたものでもあるといえる⁽¹⁾。

西洋ではアリストテレストマスの「政治人（大衆）」に基づく「共通善の政治学」が中世まで正統派の理論になったが、近代以降、「政治人」よりも「経済人」の理論が社会科学では主流派となっていく。しかし、近年人間は本来利他的な「政治人」であるという議論も復活している。

哲学者スティーヴン・クラークは『ポリスの動物』で、アリストテレスが「ポリスの動物」から排除した女性や奴隷や動物も「社会性」をもつ存在として肯定する。「人間の社会性」は高等動物と共通する「社会衝動と社会形式」に基づいていて、すべてのものと「交流や共働」することが「最高の生き方」である。

動物行動学者フランス・ドゥ・ヴァールは『あなたのなかのサル』で、人間には、政治的な善悪の二面性があるが、類人猿と共有する「コミュニティーの価値」を重視する感覚があることを指摘する。それは「平和を保ち、協力的な雰囲気」を作り出すという「公平感覚」であり、コミュニティー全体の「共通する利害」から生じるものである。

現生人類（ホモ・サピエンス）がネアンデルタール人のような旧人類と異なって存続できたのは、現生人類の方が家族以上の大きなコミュニティーを作ったからであるという見方がある。また、現在の人類学では農耕牧畜社会よりも狩猟採集社会の方が戦争もなく、協働する平等なコミュニティーを作っていたという議論が一般化している。また日本の考古学でも、狩猟採集民の縄文人が戦争を知らない平等なコミュニティーを形成していたことが評価されている⁽²⁾。このようなコミュニティーのなかで、人類は共働生活という本来の政治人の生活を送ってきた。

社会契約論と「政治人」

アリストテレスとトマスの「政治人」による「共通善の政治学」を全面的に批判したのは、17世紀のトマス・ホッブズである。ホッブズの自然状態における「自然人」は、自由で平等であっても、孤立して協働することがなく、自己の利益を最大限に追求して戦争する「経済人」である。そのため彼らは、社会契約を結び、代表者に絶対的に服従することによって、戦争を止めるが、政治に参加する「政治人」にならず、「自己保存」や「私利私欲」

益」を追求する「経済人」にとどまるのである。

これに対して、ジョン・ロックの自然状態における「自然人」は、ホッブズと異なり、戦争状態ではなく、コミュニティーを形成する自由で平等な「政治人」である。しかし、その自然状態ではしだいに「虚しい野心、邪な所有愛、邪悪な貪欲」によって争い、墮落するために、社会契約を結んでコミュニティーを再建し、個人の権利や自由を守る「政治社会」(civil society)を形成する。ロックの場合、ホッブズとはまったく逆に自然状態の政治人が経済人となって墮落したために、新たなコミュニティー＝政治社会の政治人として主権者になるのである。

ジャン＝ジャック・ルソーの『人間不平等起源論』では、自由で、平等な「自然人」は、ロックと異なり、孤立した存在であり、「政治人」ではないが、ホッブズと異なり、「憐みの情」のような利他性もあり、お互いに争うことはない。しかし、「冶金と農業」というふたつの発明によって人間の社会は技術的には進歩するものの、不平等は拡大し、戦争状態になってしまう。そこでは人間はもはや「他人の評価によってしか生きることがない」「社会人」(l'homme sociable)である。

そのために『社会契約論』では、このような「社会人」あるいは「経済人」のような「あるがままの人間」が個人の欲望のままの「自然の自由」を捨て、「共通の意志」、「共通の利益」である「一般意志」(つまり「共通善」と考えられる)を得て、それによって制約された「政治的自由」「道徳的自由」を得るのである。つまり、ルソーの社会契約は「社会人」「経済人」でしかない普通の人間を「政治人」に変化させるためのものである。

ロックやルソーは、人間が近代では利己的「経済人」になったために(ホッブズでは人間は本来「利己的」)、社会契約によって「政治人」となる理論(ホッブズでは代表者だけが「政治人」)を展開した。

18世紀のアダム・スミスの『国富論』は、利己的人間でも「見えない手」によって社会的発展がなされ、ホッブズと異なり戦争状態にならないという「経済人」モデルを主張した。このような経済的自由主義は、イギリスでは主流になった。そこで重んじられるのは平等より自由である。

これに対して、自由とともに平等も要求するアメリカのリベラリズムを代表するジョン・ロールズの『正義論』も、基本的には「経済人」に基づく主張である。『正義論』は、政治的には価値中立的な反卓越主義的自由主義、つまり政治は「善き生」をめざすものではないという自由主義に基づいている。ロールズは個人の利益を追求する合理的選択論を用い、また「無知のベール」によって個人の利益を考慮せずに正義の原理を選択するというが、このことは『正義論』ではロールズの間論は「経済人」であることを示している。

これに対して、コミュニタリアンのマイケル・サンデル『リベラリズムと正義の限界』は、ロールズを批判し、「哲学的人間学」に基づく「共通善の政治学」を展開する。サン

デルにとって、人間は、自己が所属するコミュニティーや伝統への「道徳的・政治的責務」が負荷された存在であり、仲間の市民とともに熟議して「共通善の政治」の実現をめざす「政治人」である。

おわりに

現代では人間は自然に（本来）、個人の自由＝利益を追求する「経済人」と思い込み、実際に利己的な人間やコミュニティーへの帰属意識が希薄な人間が増え、そのように行動する人間が増えているように思われる。現代の民主政治は、圧力政治化、利益集団政治化し、集団的ではあるが、私的利益を追求する政治、つまり「経済人」の政治となっている。また経済的先進国でもポピュリスト政治家が政権を取るようになってきているが、その指導者は経済的発展を約束し、民衆もそれを信じて投票することが多い「経済人」の政治である。現代の戦争も、アメリカの戦争は「軍産複合体」の利益が背後にあり、ロシアの戦争は民間軍事組織が実働部隊であるように、むしろ「経済人」の戦争になっている。

このような「経済人」が増えていくことは、とりわけ環境破壊や貧富の格差などの現代のさまざまな政治問題を解決せず、むしろ悪化させていくことである。環境問題や格差問題は、個人の権利＝利益追求を肯定するという「経済人」モデルでは解決できず、集団が協働で共通善を追求するという「政治人」モデルで考える必要がある。

実際にはかなりの人間が日常的に（本来）自分たちが所属する地域社会や会社のなかで、協働して利他的な「政治人」として活動しているはずである。現代の哲学、人類学、生物学、心理学、脳科学などでは、「利他的遺伝子」「集団脳」「共感」などがコミュニティーのなかで暮らす人間には存在し、それらに基づいてかなりの人間は利他的に行動していることが論じられている。

注

- (1) 「共通善の政治学」に関しては、菊池理夫『共通善の政治学 ―コミュニティーをめぐる政治思想』、勁草書房、2019年参照。
- (2) 菊池理夫「日本のユートピア ― 縄文から人新世まで」 菊池理夫・有賀誠・田上孝一編著『ユートピアのアクチュアリティ ― 政治的想像力の復権』、晃洋書房、2022年参照。

参考文献

- アクイナス、トマス（2009）『君主の統治について ― 謹んでキプロス王に捧げる』、柴田平三郎訳、岩波書店
- アリストテレス（1961）『政治学』、山本光雄訳、岩波書店

- アレント, ハンナ (1994) 『人間の条件』、志水速雄訳、筑摩書房
- 菊池理夫 (2018) 『社会契約論を問い直す — 現代コミュニタリアニズムからの視座』、
ミネルヴァ書房
- クラーク, スティーブン (2017) 『ポリスの動物 — 生物学・倫理・政治』、古牧徳生訳、
春秋社
- サンデル, マイケル (2009) 『リベラリズムと正義の限界』 (原著第二版)、菊池理夫訳、
勁草書房
- スミス, アダム (2000) 『国富論 2』、水田洋監訳・杉山忠平訳、岩波書店
- ドゥ=ヴァール, フランス (2005) 『あなたのなかのサル — 霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源』、藤井留美訳、早川書房
- ロールズ, ジョン (2010) 『正義論』 (改訂版)、川本隆史・福間聡・神島裕子訳、岩波書店